

「日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白」の
資料と解説

日本ホーリネス教団

福音による和解委員会



友の絶景堂

行發日曜木週毎 行發日一十月一十年五十正大

第一千三十ニ號

ヨシニア契約を新にす	道内一巡記	藤久真吾	消息	京都通信—淺草天幕傳道報	台海南部傳道	安 部 生	一日一訓	米 田 生	詩篇四十五篇	（説教筆記）	ヤソンとサイレン	ダニエル・ステール	リチャード・ウェーバー	神の言を語れ	幼 羊 生
ヨシニア契約を新にす	道内一巡記	藤久真吾	消息	京都通信—淺草天幕傳道報	台海南部傳道	安 部 生	一日一訓	米 田 生	詩篇四十五篇	（説教筆記）	ヤソンとサイレン	ダニエル・ステール	リチャード・ウェーバー	神の言を語れ	幼 羊 生
ヨシニア契約を新にす	道内一巡記	藤久真吾	消息	京都通信—淺草天幕傳道報	台海南部傳道	安 部 生	一日一訓	米 田 生	詩篇四十五篇	（説教筆記）	ヤソンとサイレン	ダニエル・ステール	リチャード・ウェーバー	神の言を語れ	幼 羊 生
ヨシニア契約を新にす	道内一巡記	藤久真吾	消息	京都通信—淺草天幕傳道報	台海南部傳道	安 部 生	一日一訓	米 田 生	詩篇四十五篇	（説教筆記）	ヤソンとサイレン	ダニエル・ステール	リチャード・ウェーバー	神の言を語れ	幼 羊 生
ヨシニア契約を新にす	道内一巡記	藤久真吾	消息	京都通信—淺草天幕傳道報	台海南部傳道	安 部 生	一日一訓	米 田 生	詩篇四十五篇	（説教筆記）	ヤソンとサイレン	ダニエル・ステール	リチャード・ウェーバー	神の言を語れ	幼 羊 生

人々はそんな計畫はない」と謂ひ居る。子は然らんことを望む。しかし子は「の傾向を耳にし居る。其は該聯盟は傳道事業に重き置かずして社會事業の方面を高調するとの事を責任ある人から聞いた。もし其が事實であるとすれば救靈のために一切を投じてかゝって居るホ教會としてはとても加入する譯には行かないものである。されば當分加入せしむに傍観の態度で居る程である。我等の群の中には何故この聯盟に加入せなかつて居る人もあるから、前述の事の外に理由がないと言明しておく。他日加入の必要が起る時には加入するかも知れない。

宗教法案の研究

該法案中で基督教に関する部分は大に研究して訂正せねばならぬ點が査ぶれば査ぶるほど多くなつて居る。今こそして發表する自由を我等は有して居ない。しかしあの種で法律となつて施行せられては基督教運動にとり人々はそんな計畫はない」と謂ひ居る。子は然らんことを望む。しかし子は「の傾向を耳にし居る。其は該聯盟は傳道事業に重き置かずして社會事業の方面を高調するとの事を責任ある人から聞いた。もし其が事實であるとすれば救靈のために一切を投じてかゝって居るホ教會としてはとても加入する譯には行かないものである。されば當分加入せしむに傍観の態度で居る程である。我等の群の中には何故この聯盟に加入せなかつて居る人もあるから、前述の事の外に理由がないと言明しておく。他日加入の必要が起る時には加入するかも知れない。

宗教法案の研究

該法案中で基督教に関する部分は大に研究して訂正せねばならぬ點が査ぶれば査ぶるほど多くなつて居る。今こそして發表する自由を我等は有して居ない。しかしあの種で法律となつて施されることは、その結果として、主教はその職務を失ふことになる。我等には信教の自由を認められること、聖書の原文通り生活する者とて、宜しく正道を歩んで堂々たる論争すべきである。

宗教法案の研究

5 9

支の歴史

昭和五年五月一日

毎週木曜日行

第一千二百三十一號

神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり

神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり

神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり
神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり	神社は宗教なり

D. 戦前の歩みの批判

しかしそれにもかかわらず私たちの教会は、『日本の軍国主義と、それを支えた天皇制については、それを批判することなく、むしろ支持をしました（12）』。教会は、当時の日本が犯した『侵略』という過ちにも気づかず（13）に、『天皇の名による戦争を「聖戦」と呼び（14）』、『「皇室中心主義」や「敬神尊王」（15）などと言つて、その『過ちを信仰の事柄と交錯し、支持をしました（16）』。そして、私たちの教会の『アジア諸国への宣（17）教』は、宣教がその純粹な動機であつたとは言え、その働きは『日本の植民地政策に追随するものであります（18）』。

12 『軍国主義と、それを支えた天皇制については…支持をしました』

神社問題や宗教法案の問題などは、国家権力がその力を行使するために、天皇制を利用して、言葉巧みに国民全体を取り込もうとしたものです。その神社問題や宗教法案に対して教会は反対の姿勢をとったのですが、それ自体非常に宗教性を帯びた天皇制については、ホーリネスばかりでなく、日本のキリスト教界全体が無批判であつたことは、注意すべきことです。

昭和「元年」のきよめの友には、大正天皇「崩御」に対する哀悼と、昭和天皇への祝福を祈る言葉が載せられています（→七〇頁）^①。

しかも、今日も皇室、皇族に対する変わらぬ愛敬の念を持つ人々が、弾圧の経験者の中にもいるわけで、天皇制とのかかわりは、後の弾圧時の教会ばかりでなく、今日の教会の課題でもあります。

① 「きよめの友」第一〇三九号、一九二六年（昭和元年）一一月三〇日発行。

友の史記

行發日十三月二十年元和昭

行 殿 日 曜 木 週 每

九十三千一第

新天皇陛下の上に
神の御祝福豊ならん
ことを祈り奉る
践祚なし給へる

大行天皇陛下
の崩御を哀悼
し奉る

ニダヤ人停道後援會々計報
小原兄の巡遊記
求轉—消息—廣告

卷之三

年を越るに因して——僕の上
に現組と
タチャード、ウイバー(七)
一日一訓　米田生
敬度^{トモ}——星^{トモ}　たかし
豊前の生組(元作業組)

光靈

行設日九十月三年七十和昭 行設 日曜木 週毎

號三百四第

既に嘗々たるものがある。嘗てある日、
迫り對して立上り止むを得ず起立しな
正義の軍であり、東洋平和の爲であり
藍色軍民解放の爲の旗艦である。
佑助を説得して聽きは宜なるがゆき
る。別れ攻撃隊の勇士「あくまの日本」
ルースベルトの聲を聞き、「僕もうなづ
せ聞かぬ前」との如きに思ふが如く、
彼等は必ず死んでから才と勇を發揮す
いと所が見えて居る。死を以て必勝の
勝つ確信である。而して勝利は自己の
犠牲と伴うべきは、世に於ても眞理
於ても不謬の法則である。

薩摩に「われら眞理に遊びて能な
眞理に居るて能あれば」とある（文
後十三〇八）眞理の實に從る精神に在る
と信する者は必ず誤り、「我等は眞理に
ひよんでゐる事無く、我等は必ずす
に居ること無く」と民十三〇三〇とは
何の如きの男の聲の眞理でもある。
本の軍人は己が血と命の爲めに死んで
行く。十代の戦士は其の上と云ふ
仰てて呪した餘の骨によつて歸つた。
主は十字架を前として「我は世に歸
り」と仰せられた。彼に從ふ者は
必勝の信念に燃えて「世に歸り」のや
あ。

最後に附加して記せた事は、

十字架の羅士としての主の名
受けた名は唯「我れる者の心」なる。

召者が「腕の即効」と小立つ
水亦骨肉の事を頗るぬ如く
來りてその父は女子兄弟姉妹
生命をも惜む者に非されば我
ることと併す」とある(附註)
瑞うは唯母を恨むせんがのみ
特別攻撃隊成尼大尉の日本軍
「娘も兄弟も女人も知人も」
しての仕事に従事して居ると言
ふのである。何時の休日と思
れて来た。指揮官御、許して
是唯國家の爲め帝國民族の保
す。何時かは初つて貰へる時
うつ、そのつまゝ娘は矢張り
じとつて下さる。
隣んで貰て因まきを得ぬ。
娘の身を以て「あゝ娘は矢張り
わづ」といふの衣料を助けて
の爲め隣の鄰に貢ぐ。殊じた
主の前に出た時「ア、娘か
僕ぞ」との御聲を以て「娘が
にも小娘にも娘の生御聲」
にちやんとお見ゆの御聲を以て
(在三大陸軍幕府監視院)。

聖書より見たる日本

中田重治著

本居宣長著
本居宣長著
本居宣長著

中田重治著

民族への警告



明治廿二年六月一日
第三回 聖徒國可

友の死

行發日六十二年六月三十正大

第十九回 每日新聞

聖徒の死第九百八號日文

宗教家として

先駆者

聖徒

宗教家として—片片
米田生
天の國の御恩慈
時々の感想
ベントコスの約束(1) キーイ
有の位に(四)
邦井良輔(四十九)
日曜祭
エスの誕生
密され幻とて一老人教入の記
大分銀高三郎の天幕祭道—伊豆大島より
朝大人後援会へ賛辞—廣告
成敗因石工が石に居るを兄て、私もお
前のやうに人の心を研ぎたく思ふといふと
詮つて仕事をしてたる石工が「先生請け
の仕事が足りないではありませんか」
兵隊は自分の供給の事を心配せぬ、持続當
で兵隊に行く者はな。神の召に應する者は
は衣食住の心配せぬでもよし。私は就職時
代は可成窮屈つて居たが如故不足であつ
た。然るに教官室になつてから三分の一
しか買つて居ないが不足はない。
軍人には兵隊の服は皆自分で下す。但
し仕事の事を心配せぬでもよし。主の御用の爲
なら去が我を食して下さる。

妻のヒスティアを治むる事が出来なければ

どうして神の事を心配せぬか出來やう。

信者者の子弟が弟は衣を浴て居ると人

の血がにじんで居はせないと云ふとウニ

スレーはよだ。

聖徒の問題に關じて全般の問題に關じキーリ

オスを讀むして行わばヨーロッパの大體分

を與したものである。(以上大會斷片)

前回の天幕祭道は、日本人の成敗因石工が石に居るを兄て、私もお
前のやうに人の心を研ぎたく思ふといふと
詮つて仕事をしてたる石工が「先生請け
の仕事が足りないが足りませんか」
兵隊は自分の供給の事を心配せぬ、持続當
で兵隊に行く者はな。神の召に應する者は
は衣食住の心配せぬでもよし。私は就職時
代は可成窮屈つて居たが如故不足であつ
た。然るに教官室になつてから三分の一
しか買つて居ないが不足はない。

軍人には兵隊の服は皆自分で下す。但

し仕事の事を心配せぬでもよし。主の御用の爲

なら去が我を食して下さる。

妻のヒスティアを治むる事が出来なければ

どうして神の事を心配せぬか出來やう。

信者者の子弟が弟は衣を浴て居ると人

の血がにじんで居はせないと云ふとウニ

スレーはよだ。

聖徒の問題に關じて全般の問題に關じキーリ

オスを讀むして行わばヨーロッパの大體分

を與したものである。(以上大會斷片)

我々は日本人である。(上記断片あ

れは國の爲に手を取つて立つゝは
國民の義務を承知して居る。國民の

精神に於ては人間の本性を發揮せり

ある。基督教は國體のものであり

世界的のものではあるが、國民を社會

するものでは決してない。聖

徒の問題に關じて全般の問題に關じキーリ

オスを讀むして行わばヨーロッパの大體分

を與したものである。(以上大會斷片)

又個人の權利を尊重せらるゝ事

の爲めに國人に対する愛護心を發揮せしむるが

これによって國人たる者は多く

如きの事とすべきでない。もし又

其の権利を侵害せしむる事とは違つ

て却て國に損失をもつて居る事は極めて

多くある事である。大體

のと構成は排斥する事とは違う

事である。宗教家として餘りに

大いに在留國が盛んで居る事は

いかに在留國が盛んで居る事は

大いに在留國が盛んで居る事は

明治廿二年六月一日
第三種郵便物認可

舊潔の友第九百十號目次
殖民教化一斷片 中田重治

碧山に登る者(説教)

同

第

九

百

行

曜

木

日

發

行

第

三十正大

行

發

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

舌の火酒

我必らず速み到らん
(黙廿〇廿)

なくともよい。ナリヤは
人なり」(雅五〇十七)
るなれば神は必ずこの用
と、信するものである。

使十六世

りて大雨あります」（玉十十）
し如く大リバイバルが起
ゆひ今はエリヤの雨を
い。この雨がなければ枯
魂を甦らす事は出来な
エリヤの如き大人物が起

エリヤの雨

（四〇四五）とあります。そこで、信する事で、死せんとする輩の心を降したまふに、國民としては間違ひます。

「君のものである。」
「君がかかる地の基督者間で、然る分らないが近頃、即ち朝鮮のモノ
來た。その其と一にしやうど何なる理由がひそみ
は曉じられない。子は

因せざる朝鮮懐古を起さしめ大任務を果さしめ給ふ事で併ある。主の先王の爲に朝鮮の兄弟とする。我等は今同一の君主の政府の下に居るものであつて忠義はない國民でなければ、しかし實に我等の身上に莫大な心事がある。我等は必ずしも同様の歎息があるが、必ずしも同様の歎息があるが、ればならぬ理由がないのである。りも使命を重んじて貰いたひ

東洋教化のものである。されば、はならぬ。から彼等のものに同一国民にならざるから、情實はない。

の天使は大和民族でなく朝鮮民族であると信じる。顯示するが所に傳するなれば取扱いの内地にある教會中に流行して居る怪しき事であると思ふ。これがもし日本に傳入せられたる原因である。しかし心配しても今の時代は信仰の生長よりも數に於て大なることを欲しまる程に問題とか場合とかいふ英名のものには多くも解りやうとする傾向があるから、現地の地の名前は日本の音派どことなるだらう。しかし私はその町に前述の便益を自覺したる基督教者をして新たに何等かの名前を付すようにして貰ひた。それで新しく付されたる名前は

朝鮮 （こうせん） **基督教者の使命** （きりすときょうしゃのしめい）

然である。しかし統合として既々日本といふ名のもとに一致する必要はない。

(日九月二年九和唱)
河間府傳承記 三第
號六十二百四 光

第一總會計

日本基督教會

第一總會記

今般開用の規定
公費員の改選

事務長が引ててから四年、和洋分科会が成

立してから一年半、

第三回十一年十一月二十日始動

益田貞次水木義輔、藤原義久等に於て開く

れた内閣議事堂にて五十九人の中堅六人一派に合

して改選を行つた。

益田貞次と藤原義輔、山口義久等

益田貞次と藤原義輔の後藤田正義等

頭をもつて、

益田貞次も田畠節に相若するが、

で前第八回から田畠節改進を行つて公費員

公費員。在支日本本邦其士の爲に税金を取

つた。

前回十一回と第二回の議事會が開かれ

た。益田貞次は議事會に於て甲子の議事會三回

中止となりた時に於て甲子の議事會三回

開設二三五號

昭和十二年十月二十九日

日本基督教會監督

車田秋次殿

文部省大臣 伊東延吉

二期間

昭和十二年十一月十六日

國民精神作興課監督方四課三

ル件今般國民精神作興課ニ關スル照

書發送ノ記念日タル十一月十日

以て始まる一週間ノ國民精神作興

週回田中 春日井國民精神作興課

コトト相成タルニ付テハ本意旨ノ

同

同

同

同

同

同

同

上にし見ててのケ声。す様已を自己十架救世水川傳生時してに従う。子は時出の

「大富」の新所を宣傳する時も、必ず「大富」の名前を冠して「大富の新所を宣傳する」といふ。これは「大富」の宣傳費が他の店舗より多くかかるからである。

兄弟第2回
在下清水院
用に當る。左
院にて總
其の店
利。即ち
立つ。而
内つ
時半よ
先在向
第三章
に居た
て語
ツトを
爲めに
力氣
と力
消され
先在に
にて總
院より
討され
て倒れ
立つ。而
内つ
時半よ
先在向
第三章
に居た
て語
ツトを
爲めに
力氣
と力
消され
先在に
にて總
院より
討され
て倒れ

明治時代の日本は、世界の先端に位置する国として、多くの技術者や学者が海外へ渡り、その知識と経験をもとに、日本の産業や社会の発展に貢献しました。その中で、特に影響力を持ったのが、明治維新後、政府によって派遣された「明治使節団」です。

三三三
CHI
の
木
松
合
小
山
草
根
川
川
根
宮
時
機
機
全
セ

108

明治節禮拜説教

一宮政吉師

自由を與へ給ふて、神の言を信する
此の福音を委ねられたる立場に置
かれられて居る我等の責任は實に重
きであります。



聖潔と再臨

讃谷基督教道館に於ける

パリクストン師禮拜説教

米田生筆記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

全國聖化大會記（續き）

(卷之三)

▲三日、早天は山崎兄約翰傳十四〇十
二十三其他より祈禱につきて説かる。午
前の聯合禮拜は明治節の事でもあり

君が代を歌ひ宮城遙拜をした
後、前號第一頁所載の竹田氏の文章によ

る宣旨を同師が何時もの莊重な口調を以て讀まれた。河邊老師の説教は馬太傳廿五章の十人の童女の話から再臨に對する準備としての聖潔、善行の光を輝かすべき事、愛の焰の燃え居るべき事を一時間十分に亘り説かる。何時もながら平易で靈的で實際生活的で聖體講解的で甚式の話振りだが實に老練なもので、信仰の老者にも幼者にも益する處多い。正午大分過ぎてやつと朝の集會が終つたが。

號十四百十號

六

行發日十月五年七十和略

○安倍氏（朝鮮解消後の使命的の協力團結の機関研究委員會を代表して）今日まで質問應答、意見等の後改めて年會より七名の委員を擧げて研究を續行する旨決したのは日左の七名議長指名にて擧げらる。

(一) 政略と第六部の關係は過渡期に於ける極端の内務及財政にあり。(二) 第六部の内務に對するものは昨秋の統合に於て擧げられたる第六部内規制委員によりて作製せられたれ文部省に提出されたる、第六部内規に依る(獨立四ヶ所設置事)

非當時下今日に至るまでの主の意を感じ
留め。秋園の創立。部室官立教會を前に協力
第六部の創立。部室官立教會を前に協力
て我らの心掛くべきは傳道者の靈性の
教養と向上なる事。我等學校の特異性
○安信總務部長。日本基督教團の創立認可
○可謂追報報せむな。本部基督教團第六部なるもの
○同様長日本基督教團第六部なるもの
ことばり以て說明す。

○安倍總務部長 正年命貞駆呼す。
「八十一名中 欠席十七名あり氏名略」
○入高、朝原珙三兩氏を正令貞として
紹介之を接入る。

監界式
(印合者) 小川朋治
(勧告者) 米田豊

○四月十七日午前九時開會
○會場 淀橋校舍
一、國民儀禮 (指導者) 泉田精一

कालीन विद्या विजय

其結果一宮氏より委員会人選の重視性
が強調され、また、米川委員長を頭領とする
道部長として、外に財務省より一名と他
四名を擧げて、任する事に一同
賛成し、其指名を伊藤部長に一任す。
廿一日、委員は左の如く登場する。

(一) 教師の講習会を逐級的に教訓開きを設け、徳育向上を計る事に着意的・實業的・社会的・文化的等に有効に奉仕のため、右の目的を達成する爲

盛況する爲めの提案をす。
（イ）自給自足が爲めに對しては促進
（ロ）各地方の幹部競争をなすこと
（ハ）地方的小倅會をなすこと
二 完全合意を前にして第六部敵対者整
備教誨録成のための上の提案をす。
（イ）各地方にリバイバル講會を開く
在

國内復道部提案(伊藤部長)
第六部設立強化運動(假稱)
一、完全合意を前にして第六部各務會の確を期する事とす。

（勧告書） 一、職事 二、官政内

○午後〇時十五分第一回亦日程を終る
第一回
○四月十八日午前九時開會續行
一、體育式 (司會者) 伊藤
勝

「愛火溶治一家」の一図を暖炉に紹介し
一寸由ふ受内中。

する全國諸教會

唱揚
十市傳道に就て

我らは通海す

した。これは傳道會のタツ、賀六〇六の火、これは紀州會のヨス、又王下二〇一三ニリヤの上衣は宣教會に於けるタツに與す。我らの主は耶穌の將とて援助で立ちあたまよお方なることを引領られた。

に就て

我らは前每す
神社

した。これは傳道會のタツ、賀六〇六の火、これは紀州會のヨス、又王下二〇一三ニリヤの上衣は宣教會に於けるタツに與す。我らの主は耶穌の將とて援助で立ちあたまよお方なることを引領られた。

我らは前每す
神社

した。これは傳道會のタツ、賀六〇六の火、これは紀州會のヨス、又王下二〇一三ニリヤの上衣は宣教會に於けるタツに與す。我らの主は耶穌の將とて援助で立ちあたまよお方なることを引領られた。

した。これは傳道會のタツ、賀六〇六の火、これは紀州會のヨス、又王下二〇一三ニリヤの上衣は宣教會に於けるタツに與す。我らの主は耶穌の將とて援助で立ちあたまよお方なることを引領られた。

した。これは傳道會のタツ、賀六〇六の火、これは紀州會のヨス、又王下二〇一三ニリヤの上衣は宣教會に於けるタツに與す。我らの主は耶穌の將とて援助で立ちあたまよお方なることを引領られた。

